

《授業と子ども》

ひらがなの授業(II)

―カタカナもかな文字のなかま(1)―

千葉 建夫

教科書の指導では

一年生の国語の教科書(光村版を例に)をみると、カタカナは九月の後半の教材、説明文「じどう車くらべ」のなかに出てくる。「バス」「トラック」「タイヤ」「クレーン」といった濁音、促音、長音のはいった四つの単語が一度に提出されている。子どもたちはひらがなの習得が十分とは言えない時期に、すでに漢字が提出されていて、さらにカタカナが、なんら順序性も考慮されずに提出されている。これでどの子にも確実の読み書きの力を育てることができのだろうかと心配になってくる。

これまで見てきたように、ひらがなは、一音節を一文字で書くことを基本とし、促音、長音、拗長音などになると一音節を二文字から三文字で書き表すようにしているが、カタカナもかな文字のなかまで、同じように書き表す。

カタカナの多くは、外来語のものの名前(名詞)として出てくることが多い。文章からまず外来語の単語をとりだ

し、ひらがなと同じように単語の音節と文字との結びつきを確認する。次に単語の音節をカタカナの文字と対応させ、五十音図の清音をカタカナで読み書きできるようにすることが基本の学習になるだろう。

カタカナの最初の授業は、次のように進めた。

ケニアからの手紙

たろうのお父さんは動物学者だ。そのお父さんから動物の写真といっしょに手紙がとどいた。

たろう、げんきですか。

おとうさんは いま あふりかの けにあと いう くににきています。ここの こくりつ こうえんは とても ひろくたくさんの どうぶつが くらして います。らいおん、きりん、しまうまなどは、にほんでは どうぶつえんでしか みる ことができませんね。ここでは やせいのまま くらしていますのですよ。



この手紙を読んで、子どもたちと次のような対話をした。
「たろうのお父さんは、どこにいつているの？」

あふりか

「あふりかの けにあというくに」

「あふりか」、「けにあ」と板書して

けにあ

「あふりかって、どこにあるんだろうね？」

「うんと、とおくにあるんだよ。あついんだよ」
「にっぽんじゃないよ。よそのくに」

教室に世界地図を広げて、みんなで探した。

地図をながめてみると、子どもたちの口からアメリカ、イギリス、フランス、イラクといった国々の名前が飛び出してくる。テレビなどでいつも耳にしているのでなじみになっているのだろう。地図では国の名前がカタカナ文字で書かれている。それを読んでいる子もいた。カタカナのわかる子が アフリカという文字を見つけた。そのアフリカの東側にある国、ケニアも見つかった。

ちずの字は、ひらがなじゃないの

「たろう君のお父さんは、この広いアフリカのケニアという国にいるんですね。地図を見ると、どこにどんな国があるかが、わかりますね」
「せんせい ちずの字は、ひらがなじゃないの？」

「そうだね。地図は、カタカナという文字でかかれているんですよ。日本には、これまで勉強してきた『ひらがな』のほかに『カナカナ』と『漢字』があって、三種の文字を使っています。『カタカナ』は、世界の国の名前や、大きな町、土地の名前をかくときに使われるのです」

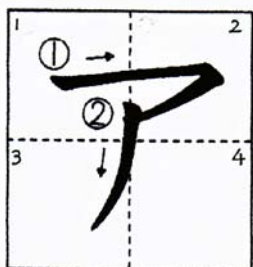
そういつて、「あふりか」と「けにあ」という「ひらがな」の側に「アフリカ」「ケニア」とカタカナ文字を書いた。

カタカナの文字の練習

ア-フリカ
あ-ふりか

対応すること確かめた。

文字を書くときには、ひらがな学習で利用した四つの部屋

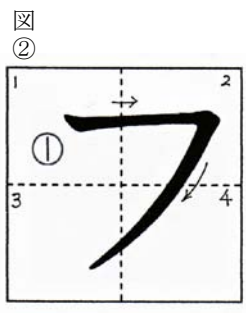


図①

を使って、字形のバランスを考えながら練習していった。筆順は漢字の基礎になるので、最初が一画、次が二画というように呼び名を教え、横線は左から右へ、縦線は上から下へという原則を繰り返し唱えながら練習をした。(図①)

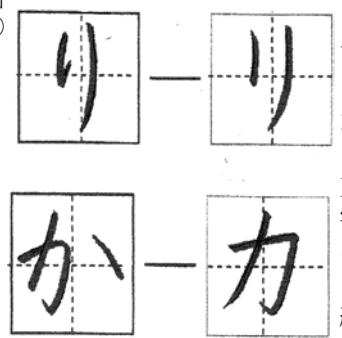
アの書き方については、『ア』の二画は、1の部屋のまん中から2の部屋のまん中をめざしてまっすぐ横線をひいてね。2の部屋のまん中をこえたあたりから、かぎにしてはらうんだよ。二画目は、1の部屋と2の部屋のまん中の壁の、少し上から下へ縦線をひいて、元氣よく、左へはらうといいよ」というように教えた。

「フ」は「ア」と似ているが、「一画のかぎのところを大きく下にのぼしてはらう」と、いうように文字の比較をしながら練習をした。(図②)



図②

カタカナの「リ」と「カ」の練習を始めたら、子どもたちが「ひらがなの『り』と『か』に似ている」とい



図③

ひらがな文字は曲線からできている。カタカナは漢字が元になっているので直線の組み合わせでできている。その違いを意識させて練習した。ひらがな文字の指導でも似ている文字の共通点と相違点を意識して練習していたので、子どもたちは文字を比較する目が育ってきていた。筆順は漢字の書き方の基礎にもなるので、一時間目は「ア」、「フ」、「リ」、「カ」の4文字の学習が

け-ケ
に-ニ
あ-ア

ライオン



シマウマ



キリン



図④

できた。子どもたちが『フ』を『メ』にかえたら、『アメリカ』になってしまふよ」といい出したので、ついでに「メ」もあつかうことができた。

動物の名前もカタカナで

次の時間は、「ア」「フ」「リ」「カ」の復習のあと「ケニア」の「ケ」「ニ」を練習した。

それから、

「たろうのお父さんの手紙には、他にもカタカナで書くものがあるんだよ。なんだと思う？」と聞いた。

「わかった！ きりん、しまうま、らいおん、でしよう」と、子どもたちは動物の名前をいった。

「そうです。動物の名前もカナカナで書きます」と説明をして動物の写真を掲示し、音節の数を確かめ、写真のわきにその音

節に対応するカタカナを、「キン」、「シマウマ」、「ライオン」と書き(図④)、「キン」、「シマウマ」などの新しいカタカナ文字を一つひとつ練習していった。

写真の動物の名前をひとつお書きのようにしたら、子どもたちが「アフリカにはもっと動物がいるんだよ」「もっと、動物を書きたい」といって、動物の名前をあげだした。カタカナ文字を一字一字練習するのを待っていられないようだった。

そこで、新しい文字のノート練習を終えた子どもたちから、ひらがなに対応させた「カタカナ五十音図」(書き順も記入)を渡した。(図⑤)

「カードを見て、書く順序に気をつけて、カタカナで書いてもいいよ」といったら、喜んでたくさんさんの動物を書き出した。とうぜん、「カバ」(濁音)「チーター」(長音)、「ヒョウ」(拗長音)のような単語も

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
		リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

図⑤

飛び出してきた。「これ、どう書くの?」と聞いてくる。一つひとつの文字の書き方、特別な音節の書き表し方については、後でちゃんと取り上げるつもりだったので、この段階では、「どのように書くのか、考えてごらん」といって、子どもたちに予想させておいた。

カタカナで書くことば

- カタカナでかくことばを整理してみると、
- ① 外国の国名(一部を除く)、地名、人名。
 - ② 外国語と外来語(外国から日本に入ってきて、日常よく使われることば)。
 - ③ 動物や植物の名前(理科の教科書で使われている)。
 - ④ ものの音や鳴き声(擬音)。
 - ⑤ あることばを目立たせたり、ことばの発音のしかたをさしめしたりする。

以上のうち最初の二つが基本的な使い方としてある。なかでも、難しいのは②の使い方だろう。パンもアイスクリームも身近にあるものとして使っていて、もともとの日本語と思いきや、子どもたちには、区別が容易ではない。子供たちには日本と外国の国の区別も十分ではないと思うけれど、世界地図を広げて、外来語の示すものが、作られたり生まれたりした国や土地などをていねいに教えて、外来語の単語量を経験的に増やすことが大事になるのかも

れない。

単語のまとまりとして教える

清音の指導の段階では、②の外来語については次のような単語のまとまりとして教えてみた。

○ 外国からきた たべものや のみもの(図⑥)

- ・メロン・レモン・トマト・アイス・オムレツなど。

ト
マ
ト



レ
モ
ン



メ
ロ
ン



ア
イ
ス



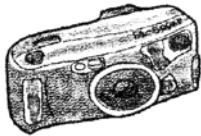
○ 外国からきた しなものや どうぐ(図⑦)

- ・カメラ・ミシン・ナイフ・アイロン・ネクタイなど。

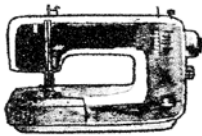
ナ
イ
フ



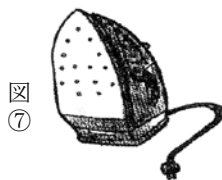
カ
メ
ラ



ミ
シ
ン



ア
イ
ロ
ン



図⑥

図⑦

③の動物や植物の名前はわかりやすく、喜んで覚えた。

○ 虫の名前 (図⑧)

- ・カ・アリ・ハチ・クモ・カタツムリ・カマキリなど。

カ



ア
リ



ホ
タ
ル



カ
タ
ツ
ム
リ



図⑧

○ 花や木の名前(図⑨)

- ・ウメ・サクラ・スミレ・カタクリ・コスモスなど。

ウ
メ



サ
ク
ラ



ス
ミ
レ



コ
ス
モ
ス



図⑨

授業のなかで一文字ずつあつかった清音の文字は、カナカナ五十音図に○をつけ、学習した文字がわかるようにし

ておいた。(図⑩)

図⑩

まちがいやすいカタカナ

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
			リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ク	ウ	
		レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	エ	
		ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

ひらがなと似ているカタカナ文字は多い。(図⑩) 似ているために覚えやすいということと、まちがいやすいという両面があるわけで、どちらが、有効に子どもたちに印象づけられるかは、教え方の工夫によるだろう。

カタカナどうしで形が似ているために、まちがいやすいものもある

図⑪
ひらがなの
かたちに
にている
カタカナ

へ	へ	か	カ
も	モ	き	キ
や	ヤ	こ	コ
り	リ	せ	セ

かたちの
にている
カタカナ

ク	ワ	ソ	ン
ヒ	セ	ツ	シ
ア	マ	ス	ヌ
	フ	ラ	ヲ

る。特に「ソ」と「ン」、

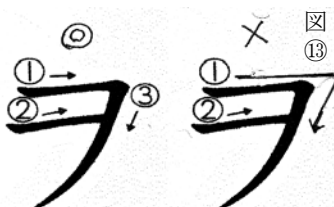
「シ」「ツ」は、高学年になっても混乱しているようだ。これは、すでに学んでいるひらがな筆順を土台に練習してみても、

どうだろうか。(図⑫)

まちがいやすい文字は、その文字を教える段階でも、ひととり清音の指導

が終わった段階でも似ている文字を比較しちがいを比べながら書き分けられるように指導した。

なお、カタカナの「ヲ」については、ほとんど使うことがないので、そのためだろうが、高学年で調査したときには一画目に「フ」を書き、二画目に「一」を書く子が圧倒的に多かった。「フ」(ふ)を先に学習しているのでその応用として自己流に理解してしまっているのだろう。これは、「一」、



「一」、「ノ」と三画で書く。(図⑬)

「ヲ」については、筆順の指導が行われていないか、指導されていても全く使用されないの定着しないのだと思う。

